松屋外集

十八

835
26
4

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4

ガラス使用

松屋外集巻之十八

目録

第一　四方白の兜（シハウシロのカブト）

第二　八方白（ヤハウシロ）　片白（カタシロ）　受張（ウケバリ）

兜の天空（カブトのテン）　洗革（アラヒガハ）

第三　前立物（マヘダテモノ）

第四　障泥（アフリ）

熊皮障泥（クマノカハのアフリ）

伏輪障泥（フクリンのアフリ）

金銅伏輪障泥（シラガネのフクリンのアフリ）

二方白（ニハウシロ）

向白（ムカフシロ）

水豹障泥（アザラシノアフリ）

大正
10.3.22
謄寫

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4

ガラス使用

黄糸組押(オサヘ)障泥

あふり尻

第五　鞍懸(クラカケ)　飾付(カザリツケ)　取付(トツツケ)

第六　上姿(カミスガタ)　下姿(シタスガタ)　衆頭(シウトウ)姿

第七　神祇齋場所

吉田八神殿

第八　いぶせー

いぶのし

尺障泥(シヤクアヲリ)　文散(モンヂラシ)障泥

かいどり姿

モツ付(ツケ)

第九　一禪御說筆記

中陰の御佛事(ミホトケ)　諡号(リヤウアン)

諒闇(ケン)の服巻纓(エイ)垂纓(スイエイ)　追号

第十　酒令(シユレイ)

觴政

酒勢令(シユセイレイ)

博拳(ケンシヨウ)

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4

ガラス使用

華頂殿侍倭學士平小山田與清稿

第一四方白八方白片白二方白の兎の曾我物語六巻八丁ふん女が事条を中ほどより左へてんい弓矢を守らんとちかひぬふなれバのび（ヘンゾク）の眷属を引つれめうくさんさつちの旗さゝせふその日の御装束ほかとよりはいみて見えぬさうがうをやさゝもさうがうをや丸ぼん志やうぐわいのひしさゝもさうがうをや丸ぼん志やうぐわいのひしさゝもさうがうをやうぐわいのひしさゝもさうがうをやうぐわいのかぶとまげぶ志ゆじやうのかわあてゑぐりをやうくと

んのつかぬきはき大悲大しめらの頬當しむー
ゆはうべんのあかいとのけをひのせ紫磨黄金
の裾金物をこそ打さりはけさんとく圓滿の月
真甲のうち畢竟空四句の四方白のかぶとを猪
くびなき五ごふ志ものいうものぼくりの太
刀をはきゐゆさうたんちやうのかよなをさし
くさしやざんまいのつさ弓實相般若の絃をの
けちどくむでやうの矢のびをきしびねるねけ
げんをれまどへもびぐのなおひなしぬふ云
々

接曾我物語の事保暦間記
も保暦間記は暦應の比の書なれバそより
以前も此ものがたりハ成るを伊勢貞丈
が日蔭纏を爲世卿の歌を引又吾山とゝ書さ
るを思ふ室町の代天台宗の僧が作りから
んよしいへりされバたゞ四方白の塊鎌倉
記の物なる證とゝべし

○義經記六巻六丁右忠信最後事条ゝ北條の二百餘
騎をたゞ獨して待うけさりあひき敵や能敵の
な關東ゝていふ鎌倉殿の御ゝうと都ゝていふ六波

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

羅殿我身ヨ取テハ過分の敵ぞのしあたら敵ヨ
犬死せんばるこそかなしけれをよからん鎧一領
○やなぐひ一腰ゝの外最期の軍して腹切なんと
思ひ居たりけるが誠ヨ是ハ鎧一領残されし事
のあぢしぞかし去年十一月十三日ヨ都を出て
四國の方へ下りぬひし時都の名残を捨のねて
其夜ハ鳥羽の湊ヨ一夜宿しぬひしより時ヨ常
陸坊をめして義經が住ゝる六条堀川ヨハいの
かゐるものゝぱんべらんと仰けるハ常陸坊申
けるハ誰が住ハいんおのぼの天魔のバみの
とかや成ハいめと申けるバ義經が住なれ一所
天魔のバみのとおらん事うかるべし主のゝめ
ヨおゐき甲冑を置つゝバ守りとなりて惡魔を
よせぬ事の有ンなるぞとて小櫻おどしの鎧四方
白の甲山鳥の羽の矢十六さしてゝ丸木の弓一張
そへておのれゝりしぞのしまゞ有りやらんと
思ひ天井ヨひさ〳〵と上りてさしのぞきて見
れバ己の時ぢのりの事なれバ東の山より日の
光さしさるいきほひより入てかゞやきさるヨ甲
の星金物ぎのとゝして見えさり取下してくさば

り長き着くざし矢のさおいうちしてかねをはくやうき絃打ー北条殿の二百よきおそしと待所き云々

按四方白の甲といひ日の光りき甲の星金物ざざとして見えとあるを考合るに四方白まて星金物ありけき事疑なしおき九郎判官の甲なれバ當時四方白といふ名目ありし證之

○伯耆巻 輦書類従 廿三丁右 本き四方白の甲著ふる者ありて田所の弟五郎左衛門尉種直と云者ご長高是を見給て例の大弓絃くひーぬ中差取てぶおひよつ引ひやうど射る種直の鎧の引合ぶと射通し後き矢さけ射出しけり二人一度き臥まけり云云

○參考太平記廿九巻十六丁左 阿保秋山河原軍事条き丹黨き阿保肥前守忠實ト云ケル兵連錢葺毛ナル馬ニ厚総懸テ唐綾威ノ鎧龍頭ノ天正本作兜四方白ノ緒ヲシメ四尺六寸ノ貝シギノ太刀ヲ板テ鞘ヨバ河中へ投入三尺二寸ノ豹ノ皮ノ尻鞘カケタル金作ノ小太刀帯副テ只一騎大勢ノ中ヨリ

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4
ガラス使用

懸出テ云々

○文正記擇書類従三百七十五巻卅七丁左ヨ
齢十有二鬘髪綰雲蛾眉掃山嶽粉粧惟馥襟宇静粛無好戯諠天生麗質清而不凡龍生龍子鳳生鳳兒者也濃紅鉢巻袖緒総角燃立計也唐紅菱縫金銀金物鏤家紋幹真而堅物縦雖強弩長握鎮西八郎爲朝難得透事家傳幼童之時代代初著晋代卯花縅鎧綿上抓抛掛肩上帯縮草摺短着下金造腰刀指添五明結降銘作小太刀篦手脛楯綺麗不及言語同色四方白五枚兜打三箇月小鍬形ノ兜従被環具星繋而擢廣與和輪云々

按廣字の旁注ヨ西東也和輪の旁注ヨ南北也
とあり眞而堅物の而字は者まゝ作の字などの誤ヨや銘作小太刀の銘作ハ銀作の寫誤也三箇月ハ三日月ヨ作るべし然て同色四方白五枚兜とは鉢の糸の兜と同色ヨ白きゆゑの名ニ同色はオナジケと訓べし

○庭訓往來六月十一日状ヨ次武具事雖見苦敷候紫糸萌黄糸綴卯花威黒糸鎧赤革黄糸腹巻唐綾小櫻黒革綴大荒目筒丸揖縄目紺糸威腹當星白

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

龍頭四方白甲各一刎同色袖云々抄中巻十六丁右ま四方白八方白常ま有もなどしもを云々扶翼ま四方白貞丈云冑ノ鉢ヲ四所ニ銀ヲキセタリナリ云々

按庭訓往来抄作者未詳判本二種あり一本は眞片假名ま注して二巻とし一本は草假名ま注して三巻とし品垂を金銀まてゐるを四方白八方白といへるなし注せるはひお事こ

○新撰類聚往来中巻十五丁左孟秋十八日状ま兜甲鉀鉾袖正首涎懸鑓袴額當肪當肩當脇當腹當腹巻袖

緒腰巻腰挟水呑緒終付緒総角上帯手蓋肘金膝鎧腋楯佩楯髭楯脅板揺板臆病板看上板冠板草摺綿紙相曳屈糸絃切絃走螯形釵首龍鷹角星白四方白蕩重雨夜甲巓辺縫延敷目掲縄目紫裳濃逆薦紬白小櫻縹卯花白糸日緋糸紬絲赤皮洗皮燻皮筒丸筒屈板首褄筒鏁筒桶

○皮威云々

○運歩色葉集加部ま甲日本作り甲ニ唐ハ作レ冑ニ螯同天辺顛辺手便同向上板鷹角吹返真向正向同鍬形鑓形同鉢雲腰巻四方白錏志古路食違形品垂縮緒ト緒同

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4

ガラス使用

一刎庭訓一羽太平記赤熊(シヤグマ)楊(同今唐書之)赤鬘赤頭
同白頭立物小旗鉢五十二枚表(ノ)五十二星(ノ)四十八枚表(ノ)弥陀四十八願(ノ)四十八枚
○軍器考九巻(右)九丁ゟ春日社本談議屋ニ義経ノ赤
糸威ノ鎧同毛ノ四方白ノ五枚冑ニ鍬形打タル
アリ又興福寺勸修坊ニ義経ノ左右ノ小手アリ
何レモ正シキ證ハナケレド古ノ物ナル支ハマ
ガフベクモアラズは〳〵三十二丁左ニ古ノ冑ノ制三枚
冑五枚冑四方白八方白片白星白龍頭獅子頭鍬
形鷹角鳶甲帽子冑ナド云物フルキ物共ニ見エ

タリイマノ制モ大ヤウ古ノ制ニカハラズタ
ダ今ハ異様ノ物ドモ多ク出來タル也古ニハシ
コロ三枚ナルヲバ三枚冑(カブト)トイヒ五枚ナルヲバ
五枚冑(カブト)トイフシコロノ形(なり)モ特(コト)ニ大(オホ)キニシテ今
ハ世ニ大饅頭(オウマンヂウ)小饅頭ナドイフモノ古ノ制(チリバメ)ニテ
アル也四方白(シハウジロ)八方白(ハウジロ)ナドイフハ鏤(チリバメ)タル銀又ハ
白鐵ヲ沃ギテ板(イタ)ヲ前後左右ニ四所(ヨトコロ)ニウテバ四
方白トイヒ八所(ヤトコロ)ニウテバ八方白トイヒ一方ニ
ウツヲ片白(カタジロ)トイフ星(ホシ)白(ジロ)星ナドイフハ其星ノ
白キ也龍頭(タウガシラ)ノ冑(カブト)トイフ物後三年ノ戰ノ日八幡

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

殿ノツクラレシ八龍ノ冑ニヤ始リヌラン云々

桜四方白は鏁ハラ銀まじハ白鐵を沃ぎし板を前後左右四所ヨ打さるをいふそれを八所ヨ打さるハ八方白一方ヨ打さるハ片白といふよしの説なれどうけがさし

○軍器考集古圖説下巻廿丁左ニ南京興福寺藏源義經朝臣甲冑半形云々圖あり今省之又卅丁右ニ春日社本談議屋源義經朝臣御鎧註文ヨ冑二拾八枚張椎形星黒塗四方白云々四方ニ銀ニテ幅一寸許ノ板金ノベ付其上ニ金燒付ヲ以テ牡丹ノ立木花ツボミ葉繪様彫物成程上ハ彫上聞スカシ彫地板銀見工候様ニ有之但前後金物ハ兩方ヨリ少シ廣キ事云々

○愚得隨筆三巻ヨ三枚冑五枚冑ト云ハシコロノ數ニテ云也シコロ三枚下リナレバ三枚冑五枚サガリナレバ五枚冑トイフ也綴大鏝頭小鏝頭ナド云今世日根野綴等アリ冑緒或ハ忍緒或勝緒ト云更ニ冑ノ緒トコソ見工タレ片白トハ篠垂ノ前一方ニアルヲ云四方白ハ四方ニアリ八方白ト云ハ八方ニハアラズ左

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4　　ガラス使用

右ニアルヲ云フ八文字ノ心欤是ヲ二方白ト云
ハ不可也トイフ云々
按片白は篠垂の前一方なるをいふ四方白
は四方まある二八方白ハ二方白へされど二方白
るをいへるまて實ハ二方白といふ名目いあるまじきよしの説なれどハ
ようけがましし
○本朝武林原始六巻十二丁左兜条ハ四方白兜は大将
ならてハ不着といふ説あり是無稽の言信ばべ
からず古傳ハ八方白兜あり野史ハ見えず云々

○中古甲冑製作辨中巻十四丁左兜之事条ハ兜の前後
又ハ前後左右へ垂るもあり杖をしきよる物
臺品垂といふ前品垂れのごとくなる寶珠あるもあ
り左右鉾形あり金まてもあり又二本づゝ四方へ出
八方へあてゝるものあり又二本づゝ四方へ出
しゝるを八方白といふともいへり白星又星白
といふハ兜の下地黒塗りて星の金色なるをい
ふこ四方へ金色の品垂あるハ皆四方白なるべ
し又惣滅金覆輪の兜を八方白と云も八ハ老陰
の數ゆゑならべし源家八領の鎧又八龍の鎧等

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

れ其數故の名なるべし云々

按甲冑製作雜三巻榊原長俊の作こゝいの四方白八方白などの説は愚得隨筆の説を襲ふるに八方白をハツハウジロと點じさるハたゞとゝりなれど武家節用ハヤハウジロと見ゆ

○甲冑製作雜一巻七丁右頭盔条ゟ篠垂は筋の異制なり頭上より半四面ゟ垂るを八鎬垂ゟ作る又蝙頭銀杏頭の名あり金銀を以て二方ゟ垂るを二方白と云四方ゟ垂る残四方白といふ八方ゟ垂るを八方白といふ或説ゟ金の筋冑を八方白と云銀の筋冑を四方白と云と尋て明むべし云々

○岡本記ゟ忘やぐまぼろし子細の事ハおくねつなどの時かぶとのはちをまらさせじおさへ又ハ城などを攻る時いし弓どう木などのあふりてみぐれんおゝめのやうゟとゝ申ゟ口傳あり云々又八方じろのかぶとゟハ惣じて忘やぐまはほけぬ事ほんゟ云々武器考證十六巻ゟ貞丈按ニ今世画工ノ俗説ニ冑ノ左右ヲ

銀ニテ包タル八ノ字ニカタドリ八方白ト云ハ非ナリ四方白ハ四方ヲ銀ニテ包ミ残ル四方ハ鉄地也其ノ鉄地ノ所ヲモ銀ニテ包メハ八方白ナリ是一面ニ銀包ノ冑トナルナリ一面ニ銀ヲキセタルモノユヱ銀ノ薄ガネガ日除ニナル也依之八方白ニハ赤熊ヲ付ズトイヘリ

○按岡本記ハ岡本美濃守宗綱ノ縁侍ノ天文十三年十二月三日ヨリ記セル書ニ伊勢貞丈ガ武器考證ヲ引テ右ノ注ヲ加ヘタルニ貞丈ガ説道理至極ナレドモ他ノ紛冗ノ説ヲ肴破セリトイフベシ

○源平盛衰記四十二巻十五丁右與一射ル扇ヲ条ヲ下野國住人那須十郎云々褐ノ直垂ニ洗革ノ鎧ニ片白ノ甲廿四指タル白羽ノ矢ニ笛藤ノ弓ノ塗篭タル眞中取テ云々

○類聚名物考武備部四方白条ヲ上ノ天空ヲ正前後左右ヘ志奈太礼トテ銀欵白鑞ヲ以テ梓形或劍形トいふ鏤ヲ板ヲ付ル星兜ナレバいふ地板ヲ二三枚摺切テ付ルニ下ノ臺ヲかさねて作セル浅バ臺志奈太礼といふ其上ヲ玉ヲ付葵花菊花ノ座ヲ付ルヲ有その忘ぬれの臺を要害の板とい

ふ三間星を摺切て玉を付さバ伊垣玉垣まゝは
腰伊垣ともいふ臺はのりも又いにべての腰へ
も巻事有りその桝形を四方へ付(ツケ)ゝらを四方白と
いひ左右ばのりも付(ツケ)るを二方白前と左右も有
我三方白といふ皆ゞ前むのりなるをバ片白(カタジロ)と
いふこ八方白い前後左右の間もまゝ一筋づゝ
有(ナシ)い八有(ナル)故もいふこ或人い此兜大将ならでい
用ばといへどもさる定(サダメ)何の書も記し誰人の云
置しといふ事我聞ば後三年の画も兵士の着ゝ
る事も見えゝり云々

○山岡俊明(マツアケ)が類聚名物考の説もと愚得随筆
も據(ヨリ)て設ゝるこ三方白といふ名目他書もを
さゝ見えされバ俊明の私ないひ出ゝるも
や

○又同志なぐれの条も科垂篠垂級垂(シナタレシノタレシヂタレ)をなぐれい
志ぐれといふもおなじ西桃垂柳をもぐれも
志ぐれやなぎといふもおなじく志は助語もて
なぐれの意こ高き所より物のしべり落るを
ぐれといふもおなじ兜の神宿よりして腰巻(コシマキ)の
正中程まで銀或い白鑞もて作ゝる板の桝形(ホコケイ)の

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4
ガラス使用

形しるしを兜の地板(チイタ)へ付て下(サゲ)るこれをいふ
て四方白三方白などいふ名も出来しるしまづ
大概四方まていたゞ前の方三筋左右方も二筋
宛後ハ三筋有べけれどもまた鏑(カブラ)ほる故ニ二筋
なるべしされども時ありより事はふさてその數
○定(さだ)おゝし一筋宛も有べきなり云々
○貞丈口授或人伊勢貞丈ニ曰(いはく)兜ノ鉢(カブト)ノ二方白四方白八
方白ノ事練鍔(ねりつば)ノ上(うへ)ノ子り物ノ事梁羽ノ事ヨツ
作ノ太刀緒ノ事鉄ヲキタル事ヲ問ル其答条
〻近世ノ俗説ニ右ノ二方白ヲ八ノ字也トシテ

八方白ト唱ルハ誤也八方ヲ白クシタル古冑ア
リムヅカシキ事ヲ云ニ及バズ直(スグ)ニ八方白也惣(スベ)
テ白(シロ)ト云ハシロカ子也銀ヲ薄(うす)ク打ノベテ鉢ニ
キセテ飾リタル也冑(カブト)ノ筋(スヂ)ノ処ヲアリニシテ銀
ノ板ヲハメタル也其ニタヾ星ノ鋲(ビヤウ)打モアリ云々
シノダレヲシテ鋲(ビヤウ)打タルモアリ又
○甲州流甲冑名所書ニ筋兜向白云々鎬垂(シノタレ)剣頭(ケンサキ)三
本云々
○與清按四方白八方白片白などの兜(カブト)ふるくより
聞えゝれど遠く隔りて見ふいちじるきさま

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

なれバ品垂(シナダレ)などなはあらじ伊勢貞丈が
説(トク)は四方を銀(シロ)まて包(ツヽ)ミ残(ノコ)る四方を鉄地(テツヂ)なるこその鉄地(テツヂ)をし一面(ヒトツ)に銀(シロ)をしきるの八方白まて惣体銀包(ソウタイギンヅヽミ)の兜を八方白といふ此銀(シロ)の薄金(ウスカナ)の日除(ヒヨケ)などなれバ赤熊を付ぬよし岡本記(シル)せしよしいへるハさもと聞ゆ二方白三方白といふ名目古よハ残さ〳〵見えず片白ハ前の片方(カタ)を銀(シロ)まて包(ツヽ)まて向白(ムカフジロ)はさ〳〵片白の一名なるべしかゝれバ品垂受張(シナダレウケバリ)などの体(サマ)などよりて二方白三方白四方白八方白といふ名あるまあら

ば品垂(シナダレ)は後三年の画巻をはじめ物まおほく見えて字面は品垂科垂(シナダレ)なども書(カキ)さり後まハ通音まて志乃太礼(シノダレ)とよべば篠垂とも書(カケ)るく同色四方白五枚甲(カブト)白五枚甲(カブト)は五枚鉢(シロ)まてその綴糸の白けきバ同色(イロノ)甲(カブト)といへるこ同色(オナシ)ハオナジケト訓(ヨム)べし八方白を武家節用まヤハウジロとよめり又ハツハウジロと訓(ヨム)る書(フミ)もあきバ古くハハツハウジロとよびたんとおぼゆ

第二受張(ウケバリ)

○貞丈口授(クジュ)まく冑(カブト)のウケバリの事ウケ張(バリ)と申名目

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

○ハ書まいまゞ見あらバ然レ共必ズウケ張ハ可有之ゝ又ウケバリ無之事ル古書ま有之天辺の穴より脂を入てしとゞめを取し事長門本の平家ま御座候是ハウケバリ無之と見えハ又後三年合戦繪ま白布まて鉢を十文字ま結て着ケ躰有之ハ是ハウケバリ無之胄ハ如此十文字ま結ハヘバ鉢の中ま十文字ゝゝり是をウケバリの代ま用ハ由傳へ承りハウケバリあるル有之人の好ミま因て用ゝと被存ハウケバリ有之ゝハ利用ま能ハウケバリ無之ハヘバ矢石中りゝ時直ま首へ強くあらバウケバリ有之ハ中ま透間有之故中ハ勢直ま首へ徹せバゝ烏帽子着ゝグハヒの爲まてハ無之ハ持ま城攻などハ石弓などま中りハウケバリ肝要ハ又後代の鉄炮まハ猶以ての事ま御座ハ南都興福寺藏義經の胄ウケバリ洗革のよし軍器考圖式ま見えてハ能御覽可被成ハ云々

○按天空より手を入て首を取し事源平盛衰記廿巻十八丁右石橋合戦の条同廿一巻十七丁右小坪合戦の条など其外物ま多く見えゝりき

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

○軍器考集古圖説下巻 廿三丁右 春日社、本談議屋、源義
經朝臣、御鎧註文ヲ浮張アラヒ草云々
○中古甲冑製作辨中巻 二丁右 古
廣ク中古ヨリハ天空、穴狹事条ハ古代ヨリ源平ノ
頃其、後足利家ノ中頃迄モ人々髪ハ不剃シテ結
ニモ頭上百會ノアタリヘトリアゲテ先モ不曲
元結ヲ永ク本取ノ先迄巻置タルナリ 後三年ノ繪巻物ノ
古画ニテツノ其上ニ烏帽子ヲ被リタル上ヘ兜
体ヲ見ルベシ著タル也烏帽子不著時ハ手拭様ノ物ヲ眉庇
ヨリ天空ヘ引入レ内ニテ結テ夫ヲ受ニシテ兜

ヲ被リタル也是モ後三年ノ繪ニ多ク見エ四方ヘ
引入タルモ見エ是ハ兜ノ鉢付ノ
板ノ威毛ノ間ヨリ夫レヒキイレシナラム故古代ハ兜ニ受張ト云物
曽テ死右ノ如ク頭上ニ髪ヲ結故髪毛多キ者ナ
ド八兜ノ内ニ髪ノ結節衝張壓テ痛ム故ニ天空
ヘ先ヲ出シテ被シト見エ以上後三年ノ画ノ内ニ人見エ長門
本、平家物語、十四巻越中、国、住人宮崎太郎ガ嫡子
入善小太郎十七歳平家ノ侍大將高階判官長綱ト組
デ組シカレタル時叔父ノ別府次郎爲重落會テ長
綱ガ兜ノ天空ヘ指ヲ差入本取ヲ攫デ首ヲ掻ト
アリ長綱此時ハ烏帽子著ザリシト見エテ髪ノ

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

先天空へ出居タル證據也古兜ニ受張之事
爰ニ明カ也云々又廿三丁右受張之事
ハ受張なき事ハ上代兜の条ハしく圖を出
しわ之爰ハ略し古ハ受張ハ洗革を用ひさりと
云説あり洗革といふハ白革なるべし中古の物
ニ重布の百重刺多し幅の廣き布まて製にべし
皺合せさるハあしく太平布の丈布よろし何き
ゟ琉球の産ニ紺染宜し近代縮緬を用ふる事あ
り若緋縮緬を用るならバ萠黄の糸まて刺べし
紅糸ハ取合悪し革の受張ハ氣塞て悪しと云又
輪のねまて付る事あり尤カ革ゟ仕付るよし縁
革ふちのきれぬ様ハ心得べし是ハ中古有し事
ハあらじ北条流まて仕出せし事ニ輪のねだ
かりまして服紗物まて包て受張まにる鞘のら
輪のねまで穿通しハ革の水ぶ結を拵へ先を湊
堅免まして穿通して留るニ不好ものニ百重刺
の方利あり此北条流の工夫ハ中古ハなけきど
し難なるべくおもハる云々

按洗革ハ白革なるべしといへるハ考ざる説
ニ洗革ハ退紅の事まて桃色をいふ伊勢貞丈

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

お況革一丁を委しされば軍器考集古圖説ま右
浮張アラヒ革といへるハ白革のもみしる哉
いへる欤其物をえざれバ定ぬ
○甲冑製作辨一名單騎要一の巻十二丁左
張は内冑ありて頭上ゟ戴き受るところなり或ハ浮張或内張或ハ請裏と云裏張ハ麻布木綿を以て製
に二重合せて綴るなり一文字十文字廻刺
と云別あり譬船ノ帆を綴るゟ似ゟり裏張ハ鉢
付の杖ゟ星とお付るこ丈夫ゟにべし其恰好ハ
頭の長短ゟ據り眉庇の俯仰ゟ應じ眼目を瞶る

事自由やにきを規短ゟにべし地帛麻布ハ汗を
燥事速し木綿ハ頭を請る事柔ゟて慊ゟし内
張の面金箔を以て濃さるあり寒暑を避容貌を
健ゟにる得ありと云内張の裏の方縦横ゟ皮革
を施て内張の強うらん事を助く名づけてカ
皮と云皮の巾寸餘計を以てに或ハ組緒を用る
ゟ有内冑ハ鉢裏の大品こ或ハ頭入といふ裏張
力皮乳締等其裏面ゟ有冑を裏張と云甲を浮張
といふと或ハ説あり云々
○單騎要略被甲辨四巻右一丁ゟ冑の浮張後の方を

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

○髻の入るべきほど堅く長く切あげおき、其所へ髻をおく髻拔入るをバ盔不挫してよし云々

○甲州流甲冑名所書ニ筋冑向白云々浮張内ヲ云内頭盔云々

○與清曰受張古代ハ烏帽子を引いき又ハ白布なて鉢を十文字ニ結ひ着くるなどより轉りて洗革なて作りくゞりて地帛麻布木綿などの百重刺或ハ紺の太平布丈布緋縮緬などよろしきなしの說ハおこさるなり源平盛衰記二卷十七丁右額打論段ニ内藏頭教盛朝臣ハ立烏帽子ニ冑を着し折烏帽子ニ冑を着せしよし見え其外物ニ記したるハ少のらず

第三前立物

○太平記十四巻箱根竹下合戰条ニ道場坊助注記祐覚ハ兜十人同宿三十餘人紅下濃ノ鎧ヲ一様ニ着テ兜ハ紅梅ノ作り花ヲ一枝づゝ兜ノ真額ニ挿タルケルガ云々又廿九巻尊氏上洛条ニ桃井が扇一桧ノ中ヨリ長七尺許ナル男ノ髭黒ニ血眼ナルガ火威ノ鎧ニ五枚兜ノ緒ヨシメ鍬形ノ間ニ紅ノ扇ノ月日出シタル残サズ開テタ陽ニ

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4

ガラス使用

耀(カヾヤ)カシ云々又巻卅一武蔵野合戦条ニハ花
一揆命鶴丸ヲ大将トシテ六千餘騎萌黄(モエギ)火威(ヒオトシ)紫
絲卯花ノツマ取タル鎧ニ紅ノ笠験ヲツケ梅花
一枝折テ塊ノ眞向ニサシタレバ四方ノ嵐吹度(フクビ)
ニ鎧ノ袖ヤニホフラシニ云々

○湘山星移集一名永享記結城落城条ニ永享十三年改
元有テ嘉吉ト云四月十五日大将兵庫頭清方云
々今度打取所ノ首ドモ同十七日着到ヲ被付實
検ヲ被遂(ゲ)ン惣大将上杉兵庫頭清方ハ小具足許ニ
テ出タマヘバ侍所長尾出雲守憲景ハ紫スソゴ

ノヨロヒニ鍬形ノ五枚冑瀬下治部丞景秀黒糸
ノ鎧ニ同毛ノ三枚甲鹿ノ角打立テ着(キ)タリケル
此両人付役ニテ其外祇候ノ人々半袴ニテマヰ
リケル云々

○軍器考一巻十九丁左ニ冑(カブト)ノ立物(タテモノ)トイフモノ笠符(カサジルシ)ヨ
リ変起リヌトゾ見エタル鍬形(クハガタ)鷹角(タカツノ)ウチシナド
云コトハ古代ヨリモ聞エキ此等ノ外ニハ法住
寺殿ノ戦ニ官兵ノ笠符ニ青松葉冑ニサシタル
ナド見エシハ此物ノ濫觴(ハシ)トヤ云ハマシ元弘建
武ノ後ニハ漸ク見ル所多シ源義貞朝臣節刀ヲ

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

賜ハリテ尊氏將軍ヲ伐シ時箱根山ノ戰ニ道場坊助注記祐覺ガ兒紅梅ノ作リ花ヲ冑ノ眞向ニ挿タル又尊氏將軍舍弟左兵衛督入道慧源ト京ニテ合戰アリシ時桃井ガ扇一揉ノ中ニ秋山新藏入光政ガ冑ノ鍬形ノ間ヨリ紅ノ扇ノ月日出シタルヲ閧キシ又武藏野合戰ニ饗庭命鶴丸ガ花一揉梅花一枝ヲ折テ冑ノ眞中ニ挿タルソノ餘土岐悪五郎康貞大鍬形打テ徑三尺三尺許ニ金ニテ桔梗ヲ打テ附タル甲長山遠江守賴基ガ徑三尺計ナル大日ノ丸打タル鍬形ノ冑ナド見エ

（共ニ太平記ニ異本太平記ニコレラ皆今ノ立物ノ類トゾ覺エル云々

○軍器考集古圖說下卷卅一丁左春日社本談議屋源義經朝臣御鎧ノ注文ヲ前立物燒付鍬形猪目スカシ大サ一方一尺バカリトリオキ云々

○水戸景山公御說ヲ後三年繪卷などヲ見テ矢石ヲなやし料ヲ兜ノ眉庇上ヲ革ニテ矢石ヲなやし料ヲ兜ノ眉庇ノさまヲ作リさる物見ありき前楯（マヘダテ）といひつべき物ニと宣（ノ）ふ實（ゲ）ヲ先賢未發の御確論ヲ得たれなりくぐりてや出來々ん保元物語ヨリ古き

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

書るハ見やるホとなしさて後ハ鹿角扇作花(シカノツノアフギツクリバナ)な
どの類を立そへ〳〵らもありて冑(カブト)の額ま立きバ
なべて前立物とよび古代の革の前楯(マヘタテ)ともいふ
べき物とひとつま稱(ショウ)せる事とハなきる成べし

第四障泥

○源氏物語浮舟湖月抄本六ま宮ハ御馬まてまこ
ー遠(トヨ)く立のへるま里(サト)びさる犬どもの出きてれ
れーるもいとおそろしく人びくなるいとあや
しき御ありきなれバほどろならん物のをー
出(イテ)きゝらんもいのさまなるのとさぶらふかぎり
心をそまとハーけるなほとくしまりなん
といひさハぎしてわの侍従をおてまゐら髪脇
よりかい越してやうざいいと珍うしき人こ馬
ませせんとにもどさらふきのぬバきぬの裾(スソ)を
とりて立そひて行(ユク)さの皆(クッ)をはのせてみはのら
ハともなる人のあやしき物をはきゝりまゐり
てかくなんと聞ゆきバやまがつのかきねのお
どろむぐらのかげまあふりといふ物を敷(シキ)てお
ろし奉る云々河海抄なむこのばきといふ物を忘
きて或本あふりと物とあり行騰(ムカバキ)泥障(アフリ)ごもし

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

きあをなましてたうつばりなむのむきかけて
やにむまの君花鳥餘情ま源氏一本あふりとい
ふ物をときてと有大和物語ま云草の中まあふ
りをしきて女をいざきてふせりうつほ第一云
かねまさの大將山のうつほ本ま尋來てむのば
きをときて皆の上ま敷て女なあひしることあり
○
今按あふりむのばき兩本相違ありといへども
物語の語據いづれ分明なればあいせて是を
用ふ但しうつばの物語のかねまさの大將
の事ハその日北野の行幸に鷹飼の人ハ狩衣を
着てむのばきをはきぬふなやあふりハ馬の鞍を付る句宮ゐぶくろを付る句宮ゐ
宇治のよひま狩衣を着ぬふゆゑまむのばき
○
をはきぬふなやあふりハ馬の鞍ま付る物なれ
ハ是又ちがひ侍らび云々
○
大和物語抄本五巻ま日くさてつゝ山まやどりぬ
草のなのまあふりをときしまて女なといざきて
ふせり云々抄ま泥障に馬なせきさる首尾に
云々
○
和名類聚抄十五巻鞍馬具部ま障泥唐韻云韉、韉障
泥和名阿ふり鞍飾也西京雜記云玫瑰鞍、以緑地錦爲、

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

蔽泥ヲ今案ニ即チ障泥ニ也後稍以テ熊羆皮ヲ爲ル之ヲ云々

○延喜彈正式十二丁右ヨ九罷皮障泥聽五位以上著之ヲ云々同東西市式十五丁左東廛条ヨ障泥廛云々同左右馬寮式十七丁右造御鞍一具ノ料ノ条ヨ障泥熊皮一張長六尺大數隨ノ小ニ云々又十八丁左造女鞍一具ノ料条ヨ障泥熊皮一張長六尺大數隨ノ小ニ云々

○西宮記臨時部野行幸条ヨ童用ノ泥障鞍ヲ云々

○舊本今昔物語十二巻多武峰增賀聖人ノ語ヨ亦掻發セト云テ被レ播發ス又泥障一懸求テ持來レト云ヘリ即求テ持來ヌ其レヲ結テ聖人ノ頸ニ懸ヨトイヘバ云フニ隨テ頸ニ打懸ツ聖人糸苦シ氣ナルヲ念シテ左右ノ肘ヲ指伸テ古泥障ヲ纏テヅ舞ト云テ二三度許シテ此レ取リ去ヨト云ヘバ取リノケツ龍門ノ聖人此レハ何ニシ給フゾト恐々ヅ問ヘバ答テ云ク若カリシ時隣ノ房ノ小法師原ノ多ク有テ咲ヒ喤リシヲ臨見シカバ小法師泥障ヲ頸ニ懸テ胡蝶々々トゾ人ハ云ヘドモ古泥障ヲ纏テヅ舞フト歌テ舞シヲ好マシト思シガ年來ハ忘レタリツルニ只今被レ思出タレバ其レ遂ムト思テ

ハテツル也今ハ思フ事露(ツユ)ナシト云テ人ヲ皆ノケテ室ノ内ニ入テ繩床(ジョウシャウ)ニ居テ云々桜ニ此事体源抄九巻ニ引ト雖モ同書廿七巻近衛舎人於(テ)常陸山中詠歌(ヲ)死語ヨ陸奥ヨリ常陸ノ國ヘ超(コユ)ル山ヲバ焼山ノ関トテ極(イミ)シク深キ山ヲ通ル也其山ヲ彼ノ口口口通ケルニ馬眠(ネブリ)ヨシテ徒然ナリケルニ打驚(オドロ)クマヽニ此ハ常陸ノ國ゾカシ遙(ハルカ)ニモ来(キ)ケル者カナト思ケルニ心細クテ泥障(アフリ)ヲ拍子ニ打テ常陸歌ト云フ歌ヲ詠テ二三返計押返シテ詠ケル時ニ云々

○長秋記保延元、四、十八、条ヨ橋金(クツカ子)地金銅表敷(ウハシキ)尋常表腹帯鞦(シタクラ)水豹鞦連著(ツヾケ)タ手綱今所ヽ用(モチヰル)泥障(アフリ)妻有(ニ)金紋(モン)鞍覆尊物(テ)有繕(ツクロヘル)但私(ワタクシニ)儲(マウケ)ノ新(アラタ)敷(シキ)加良(カラ)美(ミ)云々

○源平盛衰記十五巻(五丁右)宇治合戦条ヨ寺法師ニ筒井ノ浄妙明春ト云者アリ自門他門ニ被(レ)免(サ)タル悪僧也橋ノ手ニゾ向ケル明春今日ハ事ヲ好デゾ装束シタルシカマノ褐(カチ)ノ冑直垂(ヒタヽレ)ニ紺ノ頭巾(キン)ニ黒糸威(オドシ)ノ大荒目(オホアラメ)ノ曽(カサ)ノ一枚交(コゼ)ナルヲ草摺(クサズリ)長(ナガ)ニエリ下(クダ)シ三枚甲ノ緒ヲ強クシメテ云々鳥黒(クロ)ノ馬ノ七寸(ナヽキ)ニハヅミタルニ黒鞍(クラ)置テ熊皮泥(アフリ)

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4
ガラス使用

障指(リサシ)テゾ乗リタリケル云々同書四十二巻五丁左
勝浦合戦条ヶ判官又浦人ニ問給フ此勝浦ヨリ
屋嶋ヘハ行程イクラ程ゾト二日路候ト申サラ
バ敵ノ聞ヌ先ニ打(ウテ)ヤ〳〵トテ鞭障(ブサリ)泥ヲ合セテ
打處ニ云々

按ニおもらは軍馬ヶ泥障(ウリ)指(サシ)さるとぃべし

○吾妻鏡十巻四十八丁右 頼朝卿入洛行列条ヶ二位家
折烏帽子(ヲリエボシ)深絹紺青(キヌコンシヤウニ)丹打(ウチ)水干袴紅衣染羽野箭夏
毛行(ムカ)騰黒馬楚鞦(アブミ)水豹毛障泥(アブリ)云々

○明月記建暦三七廿五条ヶ公卿勅使發遣日也云
々前駈十人京出装束也於栗田口云々忠廣左衛門
大夫云々水干鞍(改テ着ニ水干装ト)云々塗泥障(ヌリアブリ)文散(モンチラシ)組手綱(クミタヅナ)云々頼武
八月十五日給云々御馬二匹云々人泥障白差縄
云々

按ニ人泥障の人字不審塗泥障の誤ヶや善本を
得て校正ぃべし

○古今著聞集六巻十五丁左 管絃歌舞部ニ字治左府御
記ニ云保延五年六月十九日丁卯依(テ)爲(ル)ニ入學吉日平
調入調畢(ヌ)即(チ)吹(ウ)十返以(テ)ニ時秋(ヲ)爲(ル)師(ト)所望(ム)也云々
昔(シ)時光習(フ)ニ平調入調(ヲ)於時信(ニ)時信云入調四天王常

所ニ守護ス也仍必給ヒ禄ヲ時光清貧無シ財ヲ以テ古泥障ヲ二枚ヲ奉ル時信ニ云々

○庭訓往来六月十一日状ニ虎皮、泥障云々

○異制庭訓往来 羣書類従 本 十九丁右 蕉夜十日状ニ虎皮、切付熊皮、障泥指ス之ヲ云々

新撰類聚往来、孟秋十八日、状ニ鎌倉年中行事、附録 羣書類従 巻廿六 丁左 ニ公方様御張鞍虎豹皮葛切付 小泥障 十二 播磨皮之白キ カ革金カ ナグ黒皮ニテクケル紫ノ鞦小泥障ヲ召レズ云云

○拾芥抄、中末、巻廿 丁左 儀式略、部ノ乗馬鞍 幸行 公卿以下五位已上黒地鞍螺鈿無シ連著鞦不著泥障ヲ三位以上竹豹切付四位豹五位虎辻総鞦六位葦鹿鞦鞦員佐大夫尉沃懸地云々

塵添壒嚢抄、三巻 卅六丁左 馬具文字事条ニ鞍シホテ云々

○飾抄 羣書類従 巻廿五 丁右 本下 和鞍条ニ行幸舌短鐙御行舌長泥障云々ま〻泥障伏輪事保元元、四、十一、御禊

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4
ガラス使用

前駈ニ右衛門佐光宗泥障ニ有リ伏輪云々まゝ祭使引

○馬鞍条ニ治承三、四、廿一、近衛使右少将顕家引馬

鏡鞍ニ鞦轅未濃（スソ）畝同村濃不（青色ナ）交ニ泥障懸ニ金銅伏輪

云々まゝ大嘗會御禊女御代前駈、鞍事、条ニ永治

元、十、御禊、前駈廿人五位十六人、蒔繪螺鈿鞍虎皮、

泥障馬ニ云々仁安二、六、廿八云々殿記ニ曰、云々少将

参通参ニ今夜前駈ニ也予問テ曰、馬令ニ指ニ泥障ヲ給ヒ放将又

令ニ結ニ唐毛ヲ給ヒ放答テ曰、指ニ泥障ニ淺沓ニ也云々まゝ廿七丁右

諒闇鞍事条ニ嘉保二、四、十七、江記ニ曰、云々泥障新ニ

裁之云々

○三議一統上巻五十三丁左騎射門ニあふりさしのら

ずあぶみばりハ苦のらばゝ泥障（アヲリ）とハ毛皮（ケガハ）の事ニ

播磨皮のまる作ゝるしからぬくるしからぬ云々又下巻

卅三丁右馬法門ニ鞍の名所の事云々泥障（アヲリ）云々

○家中竹馬記羣書類従八巻十五丁百十左ニ旅馬ニあふり指、

○事遠路ニとなハ不苦（クタ）但それ洛中などハより頓（ヤガ）

てあふりさして可乗（キ）ハ不可然又切付ニあふり

をいるゝ略儀のゝ也云々

○桃華蕊葉（翟書類従本十六丁左）鞍具足事条々泥障伏輪（或以黄糸組押之）障（ママ）人懸（ママ）北御幸及春日詣等之時用之行幸日地下前駈不指泥障攞政乗用馬同不指泥障之由見玉葉

按玉葉は異本ゟ玉蕊ゟ作るゟ従ふべし

○諸鞍日記ノ移シノ鞍事条ゟ力革ハ赤革ニテ包（ママ）タリ泥障ハサヽヌナリ云々まゝ御幸鞍条ゟ泥障ハサヽヤクノ泥障トテ馬ノ皮ヲ黒（クロ）ク塗（ヌリ）タリ根本ハ琵琶（ビワ）ノ捌面（バチメン）ノ塗（ヌリ）様（ヤウ）ニシテ櫨（ハヂ）ノ木ノ汁ニテ染タルナリ云々

按玲人（ガクニン）東儀筑後守の家の先祖傳来の譜奥書ゟ琵琶の捌面ハジの木の汁（シル）ゟて塗（ヌル）ゟしゝ玉シヤクノ泥障物具装束抄ゟ尺泥障と見ゟ

○布衣装束抄馬具事条ゟあらふりの事くまの皮云云

○御随身三上記（翟書廿一書類従本永正九閏四十五条ゟ雨ふり及晩参（ヌル）御馬飼申（ス）黒鵜責（セメ）申伺申則御出なり鞍を被置候責申候て以後久敷条々御物語共

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

祓仰聞昔ハ馬を責るハ鞭(ムチ)ゆのげ行騰(ムカバキ)を副て出馬を責させ候子細とハ御書有之又あふりさし乗(のり)事御尋申候又鞍ハ小あふりつけ候儀御尋有之私の鞍ハ小あふり候云々又廿四丁左同年五、廿条ヒワノ鞍小(コ)アフリのぎ懸(カケ)御目(ニ)ハ云々

○物具装束抄、和鞍具、条ハ尺(シヤクノ)泥障(アフリ)切付、之時用(ヒ)之大溜(ニハ)不用(ヒ)之云々

○岡本記ハあふりの見せやうとて定まれる法とてハ有べのらバ左手にけ右まて二ッを引そろへてたゞへなる方を人の方へなして出(イ)ハ云々

○類聚名義抄法中巻 鞍部ハ障泥アフリ云々同僧中巻 革部ハ韉アフリ云々

○字鏡集六巻 革、部ハ韉(シヤウ)アフリヤブヤ云々同

○伊呂波字類抄八巻 安、部、雑(ザフ)物門ハ泥障アフリ云々

亦泥鞍(アフリクラ)云々

按泥鞍は泥障鞍を寫脱(ウツシヌ)せしなるべし

○下學集下巻十七丁左 器財門ハ泥障アフリ云々

○節用集、安、部器財門ハ障泥アフリ鞍具云々

○撮壌集、中巻、鞍馬、部ハ障泥アフリ云々

○運歩色葉集安部ハ障泥アフリ一懸(ヒトカケ)云々

○武馬必用三巻十六丁左ヶ切付ハ志なひてゆるまざる戎用障泥(アフリ)しをなひてやはのなる戎可とす云云

○本朝軍器考十二巻十九丁右ヶ障泥(シヤウテイ)俊名抄ニ唐韉ノ韉泥鞍ノ飾也トイフヲ引テ阿布利(アフリ)トヨム又西京雑記ノ玫瑰(マイクワイ)鞍縁地錦(キン)ヲ以テ蔽泥(デイ)トス後ニヤ熊羆(ユウヒ)ノ皮ヲ以テコレヲツクルトイフ吏ヲ引テ蔽泥ハ障泥也トモ注シタリ式ニ延喜ノ凡罷皮、障泥ハ五位以上コレヲ著ル事ヲユルス也ト見ユ又金伏輪ノ泥障或ハ黄絲組ヲ以テコレヲ押(オサ)フ御幸及ビ春日詣テ等ノ時ニ華族ノ人コレヲカケラル行幸ノ日地下ノ前駈ハ阮障ヲサヽズ攝政乗用ノ馬ニモサヽレズナドモ侍ルメリ王葉又常ノ時ノゴトキ泥障ヲ用ヒズトモ又遠所ノ儀ニ泥障ヲサスベキコトハ表袴奴袴(サスキ)ナドノ馬汗ニケガレン事ヲイトフガ故也トモ見ヘタリ武士ノ騎馬出立トイフニモ泥障サスベカラズ但アブミズリハクルシカラズトイフ吏アリ泥障トハ毛皮ヲイヒアブミズリトハ播摩草(華)ノ作(ツクリ)ヲイフヨシ注シタレバ障泥トハ熊羆等ノ皮ニテ作レ

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

ルニテ鐙磨(アブミズリ)トイヒシハ今ノ板泥障トイフモノ
ノ類ニヤ甲冑ヲ帯スル時モ大ヤウハ泥障ヲバ
サヽザル也義家朝臣ノ像又フルキ繪共ニ畫(カヽ)シ
所モ泥障サシタルハ見エズサレド又源平盛衰
記ニハ熊皮ノ障泥サシタリ十ド云吏見エタリ云
云

○本朝武林原始四巻十一丁左馬具部障泥の条に裝束
抄曰攝政乘用を障泥を指さるよし光明峯寺記に
見えたり按に一説に障泥ハ後世の物にて古代
ハ鐙磨(アブミズリ)といふ物ありと無稽の言ニ延喜式江次
第に出たれバ其前久しき時よりあるならん云
々

○安太武久路下巻あふりの事の条にあふりの事或人
の云和名抄に障泥唐韻に韓障泥(和名阿乎利)鞍飾也
とあれバ古今馬鞍の具ハ志(し)れがたけれども昔と今
との製作の違ひし有(し)哉(や)寿俊答て云あふりの製
作ハ古今大きなるひがめ事ハ所見をし只大同
小異のミ欤也但し文字の事ハ延喜式和名抄等
ニハ障泥と注て有(り)飾抄桃華藻葉等ニハ泥障と
上下に注(しる)シテ有(り)凡(ソ)あふりといふもの我朝むの

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

しの見えし始ハ延喜式ま御鞍一具を造る料の條ま障泥皮數隨大小緋革十條障泥結料又女鞍一具を造る料の条ま障泥熊皮一張長六尺と出こり去なが ら此しの古ハ高位浅位まくよりてゆらしぬふ事まや則延喜式彈正臺の条ま凡羆皮障泥聽二五位已上著一之とあり又飾抄ま永治元御禊前駈廿人五位十六人時繪螺鈿鞍虎皮切付泥障六位四人縁螺鈿鞍葦鹿切付泥障とあり又桃華葉葉まハ泥障伏輪革族人或以二黄糸一縛レ押レ之御幸及春日詣の時用レ之行幸日地下前駈不レ指二泥障一攝政乘用馬同不レ指二泥障一之由見玉葉とあるをおもへバ五位六位まハ限らず地下の事まてある欤但し式まいひし所ハ熊羆の皮の障泥は五位已下の者まハ禁ずるといふ事成べしされハこそ彈正臺の式まに出ふれ彈正大弼ハ檢非違使をうけ給る官那るや忘ゆるしぬふ事なる欤小笠原殿聞書まも熊の皮のあふり行騰脛巾鞘等は彈正大弼の人ハくるしからず彈正左衛門ハ忘んしやくバべしとあるをおもへバ熊羆の皮なとをもちゐんしやくせよとの事二或人又問ていふ毛皮の物をあふりといひ

なめし皮の物をあぶミばりと云と有ハいにのべ
壽俊答て云是又ハ、ろえがふしばてゐ和名抄
ゐ西京雜記ゐ云以テ緣地錦ヲ爲ス蔽泥（今案ニ即障泥ニ也）後稍ノ以テ
熊羆ノ皮ヲ爲ル之ヲ有ゐ毛皮の事とゐ見えば又朝鮮
國の障泥といふものはなめしかはの物ゐ雲龍
を畫（エガ）きし也又阿不利（アブリ）ハ阿不美須利（アブミスリ）の中畧ならん
んされバとゐ一物ゐして只毛皮となめし皮
との相違なるべし又和名抄ゐ承鐙肉と出（イ）て阿
布美須利（アブミスリ）とあるものハ障泥の義ゐハあらず馬
形の名所こされどゐ承鐙肉を覆（オホ）ふかざりなれ
バ後世訓を同せ一事欤又或ル人問て云むらしよ
り我朝の武人ハ障泥ハさされぬ事の由左ゐ有べ
き事ゐやと問壽俊答ていふあふりと云ものハ
ゐと治平無事の時遠路途中ゐて表のをのまさ
しぬきの袴の馬の汗ゐはけおれん事をいとふゆ
ゑなりとあれバ旅引などの具ゐ入べき物欤
桃華蘂葉ゐ攝政殿御乘用の御馬ゐハ泥障をさ
したまハぬ事見ゐれバ武士（モノ）のミゐもかぎろべ
のらバ武士ハとゐ馬を急ゐすゐる事にあらバ
あふりを用ざる事なるべしされバ何事をゐせ

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4
ガラス使用

ふ軍陣又ハ流鏑馬（ヤブサメ）以下の騎射ゐる時ハ殊ふあ
ふりをさゐ事なし又馬をはしらゐる時障泥も
そづゐ事ハ我朝のみふもかぎらず朝鮮人ゐ戯
馬ゐる時ハあふりをもばにゐなり其外阿蘭陀國
ふハあふりと云べき物一向なしとおくあふり
といふ物ハ鞍覆（クラオホヒ）太覆などの類のゐのと見えゝ
り云々

按伊勢貞丈評ふ表の袴さしぬきの袴の馬の
汗ふけごさんおとをいとふゐゑなりとあせ
ばとハ何書ふ出さるや引書なきハいかゞと

云々されど軍器考ふ見えゝる説なり

○赤鳥隨筆ふハ障泥蔽泥トモ云フ和名抄ニ見エタリ泥（ドロ）ヲ障（サヘ）ルトモ泥（ドロ）ヲ蔽（オホ）フトモ云フニ據（ヨリ）テ考レバ比、物元（モト）ハ雨雪ノ日泥（ドロ）ヲ馬足ニ蹴立（ケタテ）テ衣服ヲ汚スヲ障（サヘ）ンガ爲ノ具也然ルヲ雨雪ノアラザレドモ是ヲ常ニ用テ餝トスルコトニナレリ晴天ノ日ニハ無用ノ具也サレバ武家ニハ軍陣又騎射ニハ必障泥ヲサバザル也海河渡ルニハ障泥ヲ水シトムユヱ忌（イム）之也大將行軍道路ノ間ハ行粧ヲ刷（カイツクロ）ヒ壯觀（ケンブツ）ノ爲ニ虎豹ナドノ障泥ヲ用ル吏

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

アレドモ戦場ニ臨テ障泥ヲ用サス吏ナキ也畫師此事ヲ知ラズ戦場ノ騎士ノ像ニ障泥ヲ畫クハ誤也又按ズ障泥ヲ泥障ト書クハ誤也云々

按古画巻騎馬の士を画ぐるきゝるは泥障をさしる圖ハゝえてなし

○與清曰阿不利はしと漢土の鞍具まて延喜式は見え障泥の市塵などしあせバいともやくより傳ハせるなるべし字面は障泥蔽泥韉などと書て阿不利と訓るなり熊皮、障泥羆皮、障泥水豹毛、障泥伏輪、障泥金銅伏輪、障泥黄糸組、押障泥尺泥障

○小障泥文散塗障泥などの名目見ゆると雨雪の日馬ざくりの水泥ゟ衣服をけがさじの料ゟ設ゝ免せバ障泥敝泥など書る成べしそ浅白日晴天ゟ用るハ壮觀のゝ免れミりて實ハふようゟ似ゝせバ筒井浄妙義經野嶋攻の時の如く軍馬ゟ用るハゝまさごの事と見ゆ伏輪は皮の縁をして縁を押ゝる成べし黄糸組、押黄糸組ハ馬皮を黒く塗ゝる成べし尺の障泥ハ馬の文ちらしを蒔ゝる文散塗障泥ハ塗て文ちらしを轉倒して泥障と書るなや、

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4　　ガラス使用

ふるくよりの事ニ夫木抄雑十屋部ヨ源仲正の
法輪百首山家述懐ヨ「さびしさに人のかゝちまかくる
あふりやの志ゝぐらなりや山陰ヨしてといふ
歌をおふりやと題して載(ノセ)こり志ゝぐらとあき
ばおふりやヨ障泥をよめるヨや歌意い
ぶかしけさど試ヨ解(トカ)ばかゝちかゝその誤ヨ
て山のゝそなかけづくりせし家の義おふり
別ハ正ニ弓柱などもなく泥障などのさまふ莚
薦の類してをほひ作せる小屋欤志ゝぐらハ山
陰なれバ下の暗きおしとき(シトツラ)こやそれヨ鞴(フヰゴ)をヨ

○せてよ色ろるべし又新撰字鏡革部ヨ鞍、雉失、反
弓弦(アフリ)阿不利とあるしのハ弓衣をいふなやまゝ
ハ鞴の字などよりあやまれるにいあらじの可
考

第五鞍(シホデ)

○倭名類聚抄十五巻 鞍馬具部ヨ鞍鞅(鞍)一考聲切韻云
○鞍辟(回)反和名之保(ノ)天(ヲ)穿(ク)鞍橋(ヲ)皮(ニ)也云々
按異本ヨ接鞦と挙てシ平デと傍訓(カタカナ)せりまゝ、
○鞅一鞍一の細注なし
○類聚名義抄僧中革部ヨ鞅シホデ云々まゝ鞍碎

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4
ガラス使用

○間及シホデ云々

○字鏡集六巻革部ヨ靺シホデ云々ま〻鞣シホデ云々

○以呂波字類抄九巻志部雑物門ヨ鞍シ字デ角代同

鞴同鞍邊帯也云々

按角代をシホデト訓ムと未詳鞴は餝付の事なて後世取付トツツケヒヨ物付モツツケとも云ふ物なり鞍ヨ結垂緒なれバやでてシホデヨ用ふる故

○節用集之部器財門ヨ鞍シホデ云々

○撮壌集中巻鞍部ヨ鞍シホデ云々

○源平盛衰記廿巻六丁左八牧夜討条ヨ鬼神ノ様ニ云ツル関屋カ頸景廉分捕ニシタリト云テ抛出ス下部是ヲ取テ持タリケルヲ北条乞取テ鞍ノシホデニゾ付タリケル同廿一巻十六丁右小坪合戦条ヨ級太郎ハ大力ナル上太ク高キ男ニテ和田小次郎カ勢ノ小キカサニ係リテ押付テウタントシケリ云々級カ首ヲシホデノ根ニ結付テ馬ニ打乗弓杖ツキ敵落合トゾ呼リケル云々

按首を取付ヨ付し事盛衰記ヨ限らず物ヨお

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4
ガラス使用

ほく見ゐ取付(トッツケ)ハ鞍(シヰデ)より垂さる緒なれバおな
じ体(サマ)の事なれど鞍(シヰデ)と取付(トッツケ)とハ別物こ
○曽我物語一巻四十七丁左　河津うち
ぶしなありけるハ大見の小藤太まちうけてい
ころしけるとぞ記したるしなし左の手のうちのめび
ニッまへの志ほの(で)の根を射さしてたり伊東ハさる
ふるほれしのなてありけるハ二の矢を
射させじと大事の手なもてなしめでのあぶみ
まおりさがり馬をけぶてなどり云々
○塵添壒嚢抄三巻卅六丁左　馬具文字事、条を鞍シホデ

云々
○飾抄(摸書類従本下巻廿二丁右)　鞍、条を唐鞍、具云々ハ子(ヲ)両方六筋
十七ニ上ニホデノモトニ付云々或記ニ云(イハ)毛(モ)ツケ云々
按八子はハ子(ヲ)と訓(ヨム)べし毛(モ)ツケ一本なハ物付
と書(カ)くり
○物具装束抄唐鞍具、部を橋付四緒手云々飾付十
云々ま〻和鞍具、部を橋四緒手云々
按四緒手と書ハ誤之又四方手なども書(カ)くるし
ありいみじきひの事之此抄を四緒手(シホテ)飾付(カヒツケ)別
を出〻れば同物なりと思ふべのらば

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4
ガラス使用

布衣裝束抔馬具事条々馬のあしらへ様の事髪
まのび沓のけび鞍ハ水干鞍切付ハあさらしの
皮上敷同皮或ハ師子面皮カ皮師子丸まて上をつ
つむふせぐみあるべし轡ハ鏡ぐつは也塩手の
くゝり服帯あぶみハ白鐙舌長むまより鋏具まで
白次ニ内々之時常式の鐙不苦次手縄腹帯はのち
んの段不然浅黄指縄打まぜ白浅黄かちん三色
左打右打二筋取合て指也指様馬の振髪より三
巻置て甲ぎわなくびの骨喉の下なてひつとき
の懸緒ハ志ばりてむまの右のときはたるむは

どゝ塩手の根またぐりの長さ一尺
二寸ゝ云
○家中竹馬記(羣書類従四百十六丁右)
け様右の志はでゝ結付て可引云々まゝ同五十
鞍は金ゝて紋をして、せくゝは志はでハ、焼付ゝ毛
ばり、或ハ赤銅ゝ紋を毛ばりなゝいとよろべし金
ふくりんハ若人(貴カ)なゝどハさして不苦但夫ゝ
事ゝなりて無益ゝこのなが
合べしかやうの物の出入ハ其人ゝ似合て志の
も執ゝる物ぞよきゝ又老若ゝよるべし云々

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4
ガラス使用

○土岐家聞書（羣書類従四百十八巻七十五丁左）
付るも又金を打くゝみてもせらるゝ也云々
諸鞍日記御幸鞍事条々ホシデハ銅ノ小シホデ
赤革ニテクケタリ力革ハ包タリ云々
○三議一統（上巻五十九丁左）騎射門ノ鞍の名所の事前輪
後輪志ほでのくつかゞみゆぎ切付力革云々
○岡本記ニ志ほでのへうしものハ四天又須弥の
四洲を表したる義ニ但シ口傳有レ之云々
○按ニ鞍ハ四所ヨリ付るものゆゑ東方沿國南方增長西
方雜語北方多聞の四天ヨリ付ハ須弥山の四方
の東勝身洲南贍部洲西牛貨洲北俱盧洲の四
洲ヨリ比シて稱せるニ
○本朝軍器考十二ノ巻六丁左鞍轡類部ヨリ四方出トイ
フモノ俊名抄ニ鞍トイフ字ヲ之保天トヨミテ
考聲切韻ノ鞍ハ鞍橋ヲ穿皮也トイフ注ヲ引タ
リ鞍ノ穿ツ所ナランニハ鞍橋トイフハ前輪後
輪トイフ物ニテ鞍橋一ツニ鞍兎トイフ説ハアヤ
マレル叓疑ベカラズ又同抄ニ轡ノ字ヲ出シテ
○唐韻ニイハク轡ハ鞍鞚也楊氏漢語抄ニ賀礼比
都乃久豆トイフ由ヲ注ス此説ニヨランニハ鞍ト轡

トハ別ナル物ニテアル也此説モ又誤レル
ニヤ鞍トイフ字ハ鞽ノ字ノ俗書ニテ鞽ハ鞍邊
ノ帶也ト韻書ニハ見エタリサレバ鞍鞽モト同
字ニテタベ正俗ノニツアルノミニ加礼比都氣ト
イフ事ハ今モ四方出ノ後ノカタメノ左ヲ捕付ト
イヒ右ヲ物付ナドイフ名アル其ヨリ出レバカク名ヅケシナド世ニイフナルモ
又アヤマレルヤ三議一統ニタベ鞍橋ノ四方ニ出シ
帶ナレバカクイヒシ也フルキ物ニハ四方出ト
コソシルシタレ源平盛衰記等但昔ノ四方出ノ形ハ今
ノ如クニハアラズ鐙ハ圓カニ少シキナル鏡ノ如クナル金物ヲ黄ニモ白クモ裝テ其ノ裏ノ
方鼻ヨリ革ヲ貫キテ鞍ヲモ穿チ其革ノ餘リニ
條ヲ重ル古キ繪ニ見エシ物ドモコトゞク皆
此例也云々

○

按軍器考集古圖説上卷卅三丁右ニ鏡四方手の圖
を載しり

○武林原始四卷十二丁右ニ馬具部鞍条ニ鞍ハ四方手也
後ノ左ヲ取付後ノ右ヲ物付ト云ふ盛衰記ニ和田小

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

治郎八三の首を二を取付(トリツケ)ま付て一(ヒトツ)を太刀の先
ま貫(ツラヌイ)て馬ま乗りさし擧(アゲ)つゝと書こり物付の号
ハ野史ま見えゞ云々

○安多武久路中巻志ほでの事の条ま志ホての事
或人問て云シホデの事を軍器考まハ和名抄ま
出し鞍之保(クラノホ)天鞴加礼比都気(タヽラカレヒツケ)と有事伐難じ学り志のあ
る事まや壽俊答て云古より今ま至るまで我朝
の鞍具ま有志かでといふ物ハくらの前後の橋(ソバヅ)
左右へ銅鉄真鍮又ハ角又ハ革などまて或ハ三
角或ハ九或ハ小さき鏡のやうなまして數四(ヨツ)を付

てむなぐい志りぐい障泥の緒等を結び付るま
のこれ伐シホデと云也むらしい後のくら橋(ホヅ)
の左右の端ま組糸或ハ革緒の類一尺五六寸ま
有べきを二條(スヂ)出して是伐(コレヲ)ど云て千飯(ホシイヒ)叔ハ馬の餌物を軍袋などいふま
のま入てゆひ付或ハ軍の時敵の首其外狩の時
などハ免鳥の類(タグヒ)少(スク)き得ものをむすび付(ツケ)ん〳〵
めの緒(ヲ)とする也則今昔物語ま維茂諸任を討(ウツ)語(カタラ)
と云條ま大君澤勝ま會て餘(ヨ)五(ゴ)の首ハたしろま
取て鞍の鳥付ま結付ぬひ〳〵りやと見えしもの

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4
ガラス使用

これあり。和名抄は鞍を天保と訓じて鞍橋を穿皮也と有り。漢字を以て和朝の鞍具なつけし事也。らのくらは日本ぐらの四方手といふべき物は見えず。然をどし字書は、鞍韉を同じ字として鞍邊の帯也と有。又韉の字は和名抄は唐韻は云鞍鞘也。漢語抄は云賀礼比と有事は予按ずるは順の比は、鞍韉としは同字といふ註書のいまだ渡らざる前と見えたり。されゆえ鞍韉共は鞍邊の帯也と註有。扨日本鞍の四方手は付て前の方の鞍ヲシホデと訓し後の方を八漢語抄の韉をカレヒヅケと訓じたる欤也。又唐韻は鞍鞘とある鞘の字は鞦鞘也とありてら國のむちのさきは付る革を鞘と云也おそき革の帯のやうなる帯紐の事をすべて鞘といふならん。其註は志ふがひて順は日本くらの後橋のトツツケは此字附合するゆえの事なるべし。順の和名の本意はかくの如く見れば分明也されむこは延喜式は緋革貫鞘と有トツ、ケの事なるべし。則其革紐の料有又うるしなて塗けるはや添の料は見えたり。扨又飾抄は八子

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4　　ガラス使用

称雨方六シホデノモトニ付ルト云々或記ニ毛
筋巳上十二ツケト記
スルなどあるをおもへバ日本のからぐらの飾な
ハシホデまでもモツケといふ名目ハありと見
えたり扨又桃華藻葉な貫鞘豹皮と見えしも延喜
式の貫鞘と同じものまでカレヒヅケの事なる
べしされバかの軍器考なも和名抄の説これまで
誤るなや鞍ハ鞽の俗字まて鞍鞽もと同し字
なてなど正俗の二ツあるのミなりと辨ぜしゆゑ
予ハ正字俗字の事さも有べきうと韻書をさぐ
し覓れどもいつて正字俗字の事ハ見えず同字

○なりとのミ見えて有但し軍器考ハ正俗の事ハ
夢なや見たりけん鞍具の事ハいまだ夢なども
見ぬと知られあり云々

按伊勢貞丈の評も軍紋（グンブクロ）といふ物古代ハなし
近世の作也又唐韻もある鞍鞘といふものハ
細き革緒もて鞍板（ユギ）の四方を付（ツケ）より此緒は鞍
を馬の胴（ドウ）も縛付（シバリツケ）クル緒（ヲ）倭鞍（ヤマトクラ）のトツ付の緒
とハ大（オホ）も違（チガ）ひたる物こ倭名抄もカレヒヅケ
とあるハ誤ニカレヒ付（ツケ）とハトツ付（ツケ）の緒の事
こ又毛ツケとは毛ハモとよぶばモツケなり

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4
ガラス使用

俗ニモツケと云物ニて物付(モツケ)の義ことといへ
ど又貫鞘を餝付と同物とおもひへるハ誤ナり
貫鞘の名目延喜、左馬寮式桃華藁葉を見ゆ明
月記、建保元、八、五、条毘沙門堂、記、貞治四、十一、廿
五、条延慶二、十二、十七条右どなひ扱鞘とも書
しれバヌキサヤと訓(ヨム)べし其ノ圖、年中行事春
日験記六波羅行幸石山縁起ニ見えて逆鞘(サカサガヘ)を
用る時鉸具(カゴ)を覆て足ニあしらひ免じの具ニ
やあらん

○武器考證目録下巻 之保(シホ)天(デ)部ニ四所ニテ各々名カ

ハルヿ古ハ聞エズ近世、俗物也鞍ノ字ヲ倭名抄
ニシホデニ當タルハ誤ナレバ久ク用来タルナ
レバ改ガタシ云々まゝ取付部ニトツケハ川
ホデニ結ビ垂(タル)ル緒也モツケ氏云物付ト云フ
ナり本名餝付(カザリツケ)也馬ノ食物ヲ袋ニ入て括付ルユ
ヱ餝付(カザリツケ)ト云俊名抄ニ轡ノ字カレヒヅケニ當(アテ)タ
ルハ誤ナり轡ハ鞍ノ字ニテ鞍ハ轡ノ俗字
也ソレヲ二ツニ分テ鞍ヲシホデトシ轡ヲカレ
ヒヅケトス二ツ共ニ誤也サレド久ク用来レバ
今改ズ云々

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

按鞴倭名抄 鋲付長秋記物トツヽケ平家物語盛衰記太平記具装束抄 長門本平家旧本モツヽケ鎌倉大草紙などその外今昔隨兵日記所見おほのれど之保天とハ別物也

○與清曰之保天は鞍和名抄類聚名義抄字鏡集以呂波字類抄なども字鏡集鞍字鏡集角代以呂波字類抄なども字鏡集鞍字鏡集角代以呂波字類抄なども字鏡集鞍字鏡集角代

飾ヲ八子トあるハ餝付の事と知べし
以上四方白八方白片白二方白の兜受張前立物
障泥鞍等の五則は
景山公水戸の大門ヲ對奉ることハ
第六上姿下姿裹頭姿かいとりおゝ
○親長卿愚記文明四年七月十日条ヲ上姿可參之
由有仰即令退出改衣裳直衣參内有一献云々
按上姿は直衣姿なる事知るべし
○同年八月三日条ヲ參内直衣人々申詞 関白日野
大将中院新前内府右
大廣又予隨身就先度申次以民部卿可申乞之
由談廣予已爲上姿云々
按此文ヲて上姿は直衣なる事明白ニ廣は廣
橋大納言予は親長自身の事ニ
○同月九日条ヲ下姿參内奏多田贈位事今日爲御
取乱明日御衰日也明後日予上姿可參内云々
○同書文明五年正月廿二日条ヲ入夜參内下姿内
侍所御神樂諸司注進付新大納言了ヌ云々
○同書文明十年正月九日条ヲ以句當内侍被仰下
云ノ上姿可參之由被思召之處爲下姿毎年佳例御
扇被下之云々

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

○同書文明十一年七月一日条ニ暁天寅刻有火災之事云々中畧餘煙及皇居之間被召用與御引直衣中畧令出御所入御安禪寺殿主上出御上姿民部卿實隆管原下姿人々群參相交供奉路次之義當番也
言語道断也末代義可愁之云々
○同書文明十四年三月廿三日条ニ雨下依召參内下姿可參之由有仰勸修寺大納言教秀同依召祇候云々申畧參仕之由可參黒戸之前云々仍雨人參仕源大納言雅行民部卿忠富上姿候簀子出御學問所東西勸大予在庭上仰云々一昨日事自民部卿許可遣

○下手人之由種々雖申遣無承引云々
○同書長享二年七月十二日条ニ午刻許自大覚寺被送御經云々次於番衆所下姿番衆等頂戴次可申勅封之云々
○同書長享三年正月六日条ニ自内裏有女房奉書
匂當内侍あきしけ志よりてんの事御免んらへ
さよしせん志よりるはるとらさうへしかゝ
なて波をてまゐりらはゝ御ゝいめんもらはん
いるものをとおほせられんらへともそや事ふら
ハんいの、らへきとの御事、らのしく云々

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

按此、女房奉書ヨ假名ヲ以テ宇倍須我多ト書ク、ルハ宇波須我多トハ称ヒまじきニ

○同書、明應三年、正月十三日、条ヨ下姿可キ參ルノ之由有リ勾當奉書中御門、大納言宣繩山科、中納言言国同ク有リ此、仰各々午剋參内申入ルニ祇候之處可キ參ルノ黒戸、南面、御庭ニ云々仍テ參入ス端、間ニ被レ敷御茵ヲ出御予ト中大ト山中ト、各在リ庭上ニ伯二位、候ス簀子ニ云々依テ仰ニ懸ケ膝ヲ於簀子ニ次ニ被レ下サレ天盃ヲ於テ簀子ニ上ニ拝領ス天盃ヲ勾當或ハ侍酌ヲ中御門大納言山科中納言自地上ニ及ビ牛飲之云々

○同月十四日、条ヨ有テ召參内ス下姿參ル黒戸、南面、庭上ニ

云々

○元長記永正十一年正月十八日、条ヨ入テ夜ニ三毬打見物ス下姿ニ云々

○後奈良院宸記、天文四年正月廿二日、条ヨ今夜右大將年始御礼被ニ參上ス上姿ニ不ス對面ニ申次ノ頭弁ニ也珍重之由返答也云々

○寶石類書九十二巻、衣服部ヨ御志ゝゐの〳〵寶豊卿、口傳ニヨ御ゆどの、うへの日記、中ヨ御志ゝにの〳〵とあり御冠ル免さぬ事なり云々

○與清曰上姿ハ親長卿記、長享三年正月六日、女房

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4
ガラス使用

○奉書ヨリ据テ守倍須我多ト訓ベシ宇波須我多ト訓ベシ
ハ訓べのらばたゝ直衣躰ナホシ
知らる下姿は志多須我多ト御湯殿上ニ記ヨ書ク
るヨ從ふべし御冠モ御袍モ免さぬ御躰ノヨシ
實豊卿口傳の說ハ主上の御上なるべし應天門
の画巻ヨ御冠モ免されば御袴のミの御姿見え
さるハそよのあらん臣下ヨハ狩衣姿といへる
よゝ裏頭姿和長記明應三、正、十六の条
康富記宝徳二、八、六の条かいどり
さがゝ徒然草百七十五段など似ゝる詞つきの名目な
ヨ

第七神祇齋場所

○吉田の齋場所ハゝと大嘗會の齋場所ヨより、
る名ゝ十訓抄二巻一段ニ等ヨ今大嘗會の時黒木の庭
とて北野の齋場所ヨほくくる云々源平盛衰記廿四
巻一丁右大嘗會儀式条ヨ大嘗會ハ十月ノ末ニ東河
ニ御幸メ御禊アリ大内ノ北野ニ齋場所ヲ造テ
神服神供ヲ調ヘ云々右ど見え儀式延喜式ナど
やうの古書ヨハト定齋場事おほかヨ由尓
波と訓ゝ太平記ヨハ齋廳所廿一巻後村上帝受禪条ト
廳場所廿五巻崇光院受禪条ナど書ハりたきらヨ限らば

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4
ガラス使用

齋場所の所見枚擧ヲ遑ナけれど大いまえうなき
まゝハ引出し然て吉田齋場所のゆゑよし左ないふべし

○親長卿記、文明五年五月一日、条〻吉田、三位兼倶卿
来齋場所、事申入被成下勅裁、自然可得其意、云々
以幽玄之例申入、故自今日依中山番代、祇候云々

○同書文明六年正月十六日、条〻早旦行水參詣齋所直衣云々

○同書文明十六年四月二日、条〻早旦詣吉田直衣社
頭于今無造営可參齋場所云々件、齋場所自御臺
樂、岡上人仍依雨於門下奉幣社司敷薦持来幣雨
々暈參、近日再興造営神
段再拜之後退歸口幣於社司參神前六角、神殿也
外神宮内外宮別御勸請諸神此也
座又諸国神社在列申祝曰次宮廻了次吉田二位
出合行合齋屋閑談歸了云々

按御臺ハ慈照義政公の室なて従一位冨子ニ

○宣秀御教書案ニ文明十一年兼倶卿當時齋場所、
再興神道口口吉田社、未造立云々

○宣綱卿記、文明十二年正月四日、条〻浴湯著衣冠
東輿先詣下五靈社、當社奉安齋場所、雨段再拜齋場所

次參吉田社、未被造
（コノ五字五靈社ノ下ニアリ）

分又兩段再拜云々

○同書文明十三年十二月二日条ゝ早旦行水直衣参詣吉田社（社頭乱後未営作詣齋場所）兼倶卿宿所尺之間立寄云々

○同書文明十三年正月四日条ゝ早朝行水著衣冠乗輿先参下御霊社次参吉田社（當社未被遷奉安齋場所内）兩段再拜了又齋場所分拜之次立寄侍従二位（兼倶卿）云々

○同書永正三年正月四日条ゝ於齋場所傍著齋服（借用兼永朝臣）参詣齋場所（自一昨夕先奉拜神事也）吉田大明神

□□神体（齋場所内奉□置大元宮）兩段再拜咒文等有之（先祓）讀次八神殿次南宮次六十余州分巡礼次改齋服行神竈寺（一所宿也）之携杉原一束扇樽等至去年三箇年居住之所也次向兼倶卿宿所（女房衆相伴新作）亦於兼滿方有盃酌次歸寺住持（兼倶卿子）出逢有一献云々

○吉田兼致記文明十六年十月五日条ゝ今日勅額事以民部卿申入給額數六分也

日本國中三千餘座
天神地祇八百萬神

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4
ガラス使用

外宮宗
内宮源
大元宮
宗源殿
此分書之進上、額紙形用、唐紙ヲ打、ニ裏只今齋場、根元
大概如ニ注進一、
齋場根元大概御注進
神祇齋場の事
おのさいぢやうしよは人王の第一神武天皇
おの国土おてはじめて神を御まつりあり し
おんげんなる父の御神まで、神代なれバつ
ちよ神でんを堂て、まつり申さる、事りな
しこの御代より神明と人王とのおやべち出
きまけるまや天下のあく神おそひ申せ一ま
よりてやまとの國いおま山まてさいぢやう
所を堂て、天神地神を御まつりあもしぞは
じめなるおをよりやうやくあしき神々れお
ばまりよまへば又同國にふの河上まおのさ
いじやうをたて、みばのら神道を行おはし
まにおかゐるお天下のあら神おどくお

ばまりけるばはじめて王城を橿原といふ所
にさだめられてにはたづみ鳥見の山にいじ
やうを営てい天照大神をはじめ奉り日本國
中大小の忌よ神そうじて八百万神をいはひ
申されしより今に皇城ちかき所に営ておの
るいはひのやらいとかやおよそ天地の諸神
くをんおやうのおんげん営るふまりて日本
最上神祇のさいじやうとはいふがくを下されけりはの後伊勢内宮は六百五十七年をへて人王十代垂仁天皇のひめ御子やまと姫の御

くをんおやうに外宮は廿二代め雄略天皇の御宇にすゑしやくありおきは千百卅よ年の後なり両宮共に姫宮の御くをんじやうおこをさるまよりて代々の御門のひめ御子もして齋宮とがうし申されにの両宮にはへ申さるいことおのらんじやうまや大神宮すゑじやくの事は伊勢内侍所齋場所おの三ケ所のほのは上古よりちやうじのせいぶんをなされ営るルのなを家君被遣御状於民部卿

神祇齋場額、内六分申ニ請、宸翰度々ニ此額事
被レ添ニ神武天皇勅筆ヲ以降　嵯峨天皇被レ改
漢字ニ之代々勅額之段勿論候就テ中當場由來
事自ニ御臺御方ニ被レ尋仰候間此一巻令ニ注進ニ申
候以テ手次ヲ内々被レ備ニ叡覧ニ候者可キ畏レ有ス候恐惶
謹言
十月五日　兼倶
民部卿殿
追啓
天万宮迂座雖レ爲ニ當月中ニ不レ可レ苦候伊勢内宮
重跡當月ニ候間神道殊ニ用之候可レ得ニ御意ニ候哉
按兼致は兼倶の子まて從二位神祇權大副こ
神祇齋場所注進狀のむま孟浪(ミダリ)おとなて笑ふ
たへさしと中ま考證まくべき事なまし
あらばおさ小民部卿とあるを忠富卿こ
○諸神記上巻ま天神地祇惣テ三千一百卅二座大神四
百九十二座小神二千六百四十座定テ日本国中大
小神社鎮座ヲ延喜五年十二月二十六日宣下ニ於山
城国愛宕郡如意峯神祇齋場所ニ奉レ安レ鎮ニ三千一百
三十二座之神体ヲ大神四百九十二神小神二千六百四十八神　同月廿八

日奉渡神躰於六十餘州矣天下諸神奉授神号之時於齋場所以テ神代正印被定神宣ヲ叓延喜以來之聖断也云々

○諸社根元記（地神五代条）ニ定ル日本國中大小神社鎮座ヲ如意峰神祇齋場所奉安鎮三千一百三十二座之神躰（大神四百九十二神小神二千六百四十神）同月廿八日奉渡神体於六十余州天下諸神奉授神号之時於齋場所以テ神代正印被定神宣事延喜以來之聖断也云々

按神社鎮座歳代考全く右の文を引くるなり

○一字の異なけれバ再贅引せバ

○神社考二巻四丁吉田条ニ卜部家説云吉田地主者本是雷神也及一條院時ニ卜部兼延始テ為社務職ト勸請春日明神以テ藤氏崇敬ヲ也日神之居天岩戸時諸神奏神樂其處降テ為山故号テ曰神樂岡又此地有齋場所大元宮日降坂龍澤等之名皆卜部所秘祟ル也云々

○宣竹殘稿ニ延徳元年己酉春三月某日伊勢外宮神宝降于吉田齋場所冬十一月某日内宮神宝復降矣前後皆在夜參半風雨晦冥黒雲入道夾光而

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

下至地如燃矣事聞于朝有旨神輿入内天子下階迎之神道宗元卜部二位兼倶侍之叡覧惟謹遂命秘之吉田大元宮云二年庚戌冬十一月釋奠詣神宮者七日梅叔藏主相從日々乞題賦詩焉于凡所經歴者終于心之所欲故次其韻○伊州連歳火于祠猶有愚民爭土宜儛護皇居去天咫雲車一夕入京師（詣吉田大神宮云々）○城樓鼓角御樓簫豈乱群神宴彼岡万壑松風無譜曲宮前擊節奏行香（神岡樂）○王城東有碧孱顔神所降臨茅數間下視秋風茂陵客齋房閉月老空山（齋場所）

○後漢三才圖會（七十二本巻）山城國神社部ゟ吉田在愛宕郡神樂岡社領五百九十石其殿名宗源殿神祇首領唯一政所神道受業明堂天下祭場也吉田藏人頭卜部神祇領七百六十七石社家大隅氏鈴鹿氏山田氏以上八人齋場所軒廻八方厚茅葺

内宮（天照大神宮）宗

外宮（豊受大神宮）源

小社（日本国中大小神祇三千百三十二座其国員各記額數）

第一高皇産靈尊

二神皇産靈尊

三魂留産靈尊

四生産魂尊

七御食津神　八事代主神

以上号元本八神殿

日本國天神地祇三千百三十二座大神四百九十
六百四座小神二千
十座延喜五十年十二月廿六日宣下同二十八
日奉渡神体於六十餘州矣以各神号於齋場所
山州名勝志十三下巻五ノ八丁左神代正印祇定云々
門額日本最上神祇齋
場本宮額日本最上日高宮大元宮日本國中三千
餘座天神地祇八百万神云々○内外宮坐齋場所
後八神殿東西鳥居額外宮宗内宮源云々此二額
從一位冨子筆冨子慈照院義政公御臺也社家說
云兼倶依靈夢勸請云々○八神殿在齋場所後鳥
居額元本神殿按八神殿中御門宣胤卿記載延徳
元年十月從二位兼倶卿奏狀云々

○雍州府志二巻八丁左神社門上愛宕郡部ノ齋場所
在吉田山始在神祇館樓門額有日本最上日高日
宮之字嵯峨天皇之宸翰也大元宮元本八神殿
額後土御門院之宸翰也又日本最上南太神宮
額并日本最上神祇齋場額及日本國中三千餘座

天神地祇八百萬神、額、共清水谷家之筆也此山有清水谷堂上清水谷稱號、起、自、往、此處者、乎外宮源宮、宇氣皇太神并內宮宗宮、天照皇太神也外宮宗內宮源、額、者妙善院從一位冨子之筆也冨子、者日野贈左府勝光公之兄右少辨政光之女而贈太政大臣義政公之室常德院內府義尚公之母也鎮魂八神殿亦莊神祇館、神祇館、者古在平安城宮內省則今二條所司、廳之西也自、茲移東山如意嶽、後土御門院文明十六年移吉田神樂岡八神、所謂高皇產靈尊神皇產靈、尊魂留產靈、尊生產靈、尊足產靈、尊大宮賣御膳津神事、代主是也此八柱、則八州守護驗神八齋靈、命八心府、神、故、以爲皇帝鎮魂之神、吉田卜部家主載萬事凡二十二社之外所、在、日本國之大社小社神職皆自、此、家下令、官位等執奏之中臣卜部元、同氏、而天兒屋根命苗裔也天兒屋根尊奉天照太神勅輔佐皇孫治豐葦原於是以三種靈宝傳皇孫是爲王道之元又以神籬正印傳天兒屋根命故是爲神道之祖天兒屋根命十二世孫雷大臣命仲哀天皇時賜卜部姓十八世孫常盤大連改卜部姓爲中臣姓至二十一世大織冠改

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

中臣爲藤原氏大織冠爲朝家將誅入鹿時思事有難以神道傳其從弟右大臣清丸清丸意美丸子是爲大中臣清丸四世曰平丸又改姓卜部依之吉田家爲神道長

○山州名跡志四卷六十一丁右愛岩郡部齋場所云俗吉田社也在神樂岡樓門南向額曰日本最上中門同額曰日本最上神宮大神祇齋場已上清水谷實秋卿筆○本殿南面造八角葢棟行東西南面破風內大額曰日本最上日高嶋帝宸筆小額大元宮後土御門院宸筆軒內中央額曰日本國中三千餘座已上地祇八百万神竪額清水谷實秋卿筆○八神殿在本殿後南向鳥居南向木柱額元本八神殿木柱額土御門院宸筆後所祭御食津神神皇產靈尊魂留產靈尊生產靈尊足產靈尊道反魂神大宮賣事代主尊已上右八柱神八洲守護驗神八齋靈神八心府神坐故式爲皇帝之鎭魂神矣神系圖傳此神殿古在神祇官舊地今二條所司館北也秀吉公聚樂城郭造營時依命所移也○外宮在八神殿西南向鳥居同木柱額外宮景竪額內宮在同東南向鳥居同木柱額內宮源竪額已上義政公室藤冨子筆○日本國中總攝社在本殿東西北至對馬額山城国中百毎社如此云々山城國二十二神

○與清曰神祇齋場所は後土御門院文明五年五月吉田兼倶三位勅許を蒙りて神祇官八神殿の跡を建立せるに其比東山慈照院殿義政公の北方藤冨子の一位信力を出して助成されしより見ゆ嵯峨天皇の樓門の額字は後世の鳩集なるべければ古代の證なはしがたし又社家の傳説その外後の書の説どりは荒唐無稽の言なて取用べくもあらず皇和眞俗通十三一条天皇永延元年十一月の条に卜部兼延爲吉田神主云々其説佛道神道無二無別と見ゆ神道名目類聚抄一巻に

齋場所の圖を載せたれば閲て知べし

第八いぶせしいぶのー

○万葉集四巻五十六丁大伴宿祢家持報贈紀女郎歌

久竪之雨之落日乎直獨山辺尓居者欝有來同

八巻四十丁大伴家持秋歌

雨隠情欝悒出見者春日山者色付二家利同九

巻卅五丁見兒原處女墓長歌

虚木綿乃牟而座在者見而師香跡悒憤時之垣

廬成人之詛時云々同十巻四十オ丁詠鹿鳴歌

秋芽子之散去見欝三妻戀爲良思牟鹿鳴母

丶五十三丁オ　秋相聞寄雨歌
九月四具礼乃雨之山霧煙寸吾胃誰乎見者將
息同十一巻廿三丁ウ正述心緒歌
眉根掻下言借見思有尓去家人乎相見鶴鴨一
書歌曰廿四丁オ
眉根掻下伊布可之美念有妹之容儀乎今日
見都流香裳丶廿四丁ウ寄物陳思歌
水鳥乃鴨之住池之下樋無礒悒君今日見鶴鴨
同十二巻十二丁ウ正述心緒歌
得田價累心礒悒事許吉爲吾兄子相有時谷

丶十六丁ウ寄物陳思歌
垂乳根之母我養蚕乃眉隠馬相而又廿丁問答
歌
相見欲爲者従君毛吾曽益而伊布可思美爲也
又廿六丁ウ羈旅發思歌
在千方在名草目而行目友家有妹伊將礒悒同
十八巻廿九丁オ大伴家持詠庭中花長歌
移夫勢美等情奈具左尓奈泥之故乎屋戸尓末
杵於保之云々

○與清曰万葉集ういぶせみいぶのしいぶせき

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

○ふせーいふせくいふこのしみいふせのりなどよ
処る其意一例ならば俗言ヨウツタウシキ又は
氣がフサグなどいふ義なるのあり四巻五十六
十丁ウ九巻卅五丁ウ十巻五オボツカナクアン
十三丁オ十八巻廿九丁オ
ジワヅラヘル義なるのあり十一巻廿三丁ウ同
ウ十二巻十六丁オ不審の義なるのあり十二巻十
ユカシキ心なるのあり十巻四十丁オ日本紀ヨ
未審欽明紀二年七月 未詳欽明紀四の字をイフ
同十五年正月 年二月
カシと訓類聚名義抄ヨは欝三巻木部呀二巻口部訝五巻言部
不審七巻ウ部未審同上などをイブカシ訝五巻言部謝同上
読

同上
をイブカルとよめり雅言集覧一巻以部ふいふの
しハシノバシク又ユカシク思ふ心ク遊仙窟ヨ
未審をイブカシと點じよるハ俗ヨ不審なる事
をいへるヨおなじけれど物語書ぶヨその意なる
ハ管見ヨハ未ダ見及ばに云々いふせしは契沖云ッ
万葉ヨ欝悒と書ていふせくとよルおばつこのなし
ともものしとしよめりいづれも同意なりといい
へり今按ヨおぼつこのなくめのしく又なげのし
き意ヨおなじうるべし又ゆうのしき意ヨ聞ゆる
ヨあり又たバウツタウシキ意なるヨあり前後

をよく見て心ま味て知べしと
注ま王仁といふ人のいぶのりおもひてといへ
るハおほつのなくあんじとづらへるよしこ酒
轉童子童子まいぶセうさふらふといへるハ疑
ハ枚擧ま遑なし

第九文明三年四月十二日一禪御誄筆記中
陰の御佛諡号追号諒闇の服

一御中陰ノ御佛事凡人相違事

初初七日、藥師如來二七日、彌勒三七日、千手四七
日、地藏五七日、普賢六七日、不動盡七日釋迦百ケ
日阿彌陀文明三、四五九後花園院御百ケ日、之時
祓用普賢云々後小松院百ケ日聖忌又
如此注之祓

一依二或人一問大閤所答条々文明三、四、十
二書寫了

一諡号追号のかはりめは

諡をばおくりなどよみて生時の行跡まはりて
沒後の号として仁徳まで〳〵るへハ仁徳天皇
と申武徳おハしましゝへハ桓武天皇と申ゝく
はしくあひふる事ハゝハねどゝ本説此ぶんま
てゝ是ハ徳まより可申ゝ所名まハゝらばゝ追

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』 請求記号 835-4
ガラス使用

号と申ハたぶん御在所の号又山陵の号などを用ひらさん嵯峨淳和陽成などハ御在所の名を御追号なりひられ字多醍醐村上などみさゝぎの号まてん光巌光明崇光などハ御奄室の額（ガク）まてん遺勅まよりて被用ん志めんじハべておぼし処しまて御号順徳等三代ハ遠島の御事りん号ハ撰らせて送り申されん近だろ稱光院などハ此例なるべくいのとてん志ろ御在所いんはまどん院号なりひられん安徳天皇なども諡号の准なるべくハ諡号ハ其人の徳なよりふん号まてんほどふ後の字をくはへて用られなる事いまふ其例なくんふ又出家の後ハ諡号なきまてん是まよりて寛平法皇の後ハ天子の諡号たえゝる事まてん

一諒闇の服ハ心喪（シンサウ）と表しゝる事まて千人ありんへけ志やうなどいかざりまてんほどふ事心と相違したるとおぼしてん吉服を着しんへバがら神事などふ志ゝぶひて十からじとおぼし処それ一日などの事ハくるしからじとおぼし処

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

しるつけむじ免より巻纓まてる其後はるばる
の宣下るかゞ何とゝるふさたまをゝ垂纓ま
ゐらしたるべき事ハおぼつかなくるもじ免よ
り垂纓まて其後はるをみを着事ゝ巻纓まさた
しるべきまてる
一大中納言以下巻纓の鉋色の諒闇の直衣束帯を
着しる関白三公いしゝゝゝ

其危爲人臣者不易爲君亦不易今君已設令令不行可乎君曰善擧白飲飲畢曰以公乘不仁爲上客云々古の酺政になぞらへ酒令と唐書百九十四下丁左李君羨傳に會内宴爲酒令各言小字云々近來張山來の酒令世に行はる五代史卅巻五丁右史弘肇が傳なる酒酣爲手勢令とあるも頁を改めず酒席にて拳を打て勝負を論ずるいいつぎのりまたじまりけん虫拳狐拳虎拳などの類おほの事文類聚續集十五巻宴飲部罰飲条に東皐雜録を引て孔常甫言唐人詩有云城頭推鼓傳花抜

席上搏拳握松子乃知酒席藏鬮爲戯其來久といへるは拳を搏て松子を握りて其員數を据て勝負を分てるなや橘泰の筆のはしにさび上巻卅丁なる拳を打事を漢土にていひ拇陣と云又まぎらはしくてゐるけんねぢなんどいふ戯を猜拳と云猜はうたがふ事こ故なはんじものを書し燈籠を猜燈といふ明皇雜記なる順投爲入比投不釋勝飲不勝者正爵既投壺篇なる見もと云々禮記行請爲勝者立馬とあるをより所なて酒政搏拳などの事ゟ起せるなるべし〳〵

国立国会図書館　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4
ガラス使用

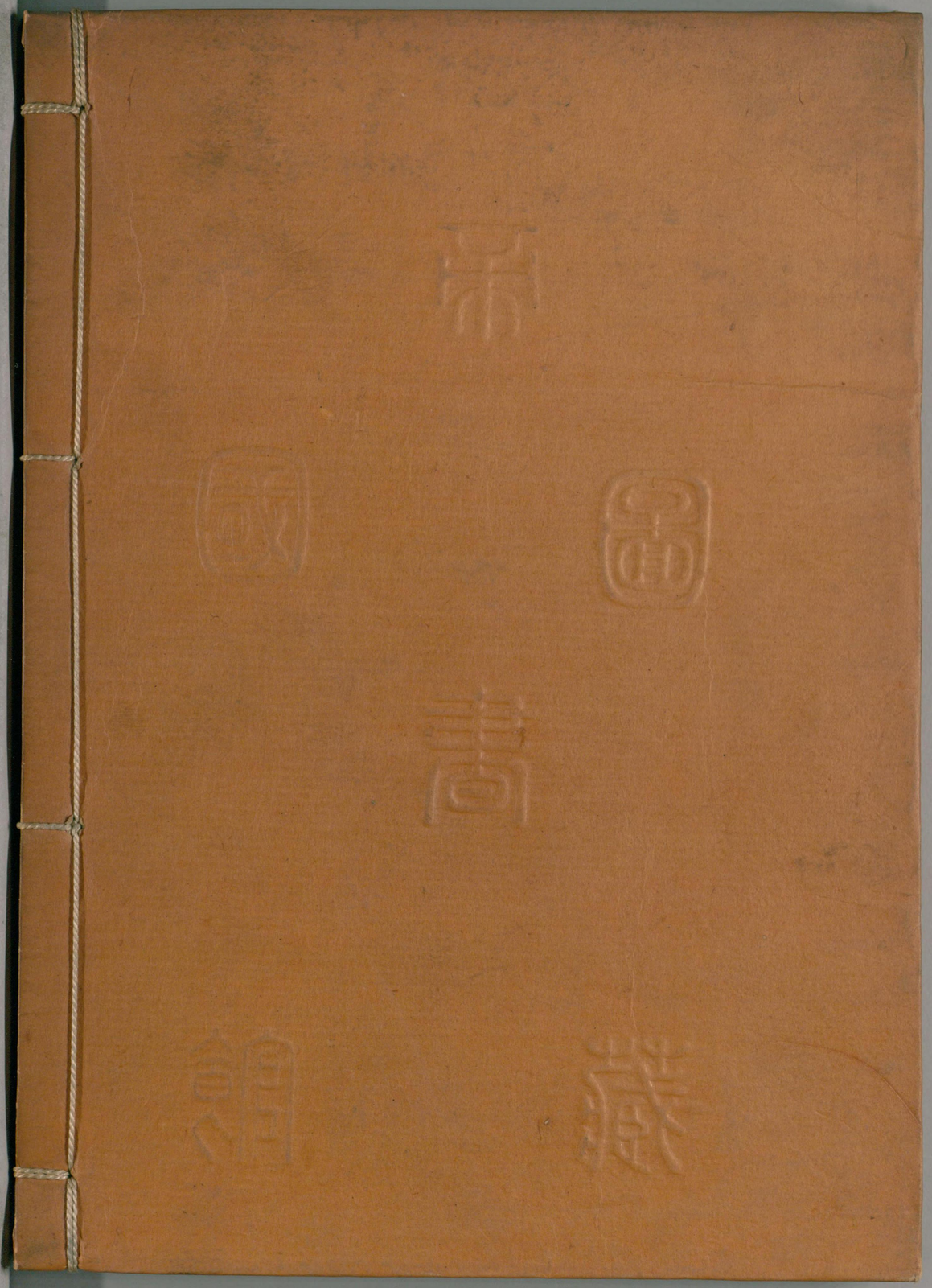
国立国会図書館　　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4

ガラス使用

835
26
4

国立国会図書館　　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『松屋外集』　請求記号 835-4

ガラス使用